



考
 化
 物
 大
 評
 判
 部

13
 3044
 2



特
へ13
3044
2

高世化物大評判 第二巻

人化人



人のせをとおまけのよきい猪らとぬらつて二十五年
の鹿らつておれ人をもあつて高世を命りしき結子の
若ふ思ひらふとのすもる蟹のよけも一の先ぬいと天物
の果より長く持めてかへりれかいらつてまゆかむち
やうにやうといふ危危人ままけぬをより海をなまよと
ぬきへまよふれよあふふ能ういふをむうしくを
産生つよ思つてつて中一れまよいつて縁もまけぬを
こうまけよいとすう人考そう高世物なすていふとも





身はくくいとクナイもせこゆふこやぐさうくア火で
かーあそめてまふてけさそらりえ出ー火家れ
はよさうーかきは中もまらり若女のいぬ播布年り
竹づまつき龜の甲のま中にするくこまーをあり
どろりろろりららとえ落ーあうやあーを
あうまいどやくとほらり遊あせハ女娘も女にぞよま
の方へはしりあう念もいんころられとやうびく行来
あうれいごさんまま来れ出らまぬのらまはまていのり
きくくアさんあそらぐ二口にいんうあづく若女が
まぬは始の初ぬけくよましか助をよ路にけよとにぞ

あしはちまをらう子たこ我口とあんうまうりあま
くく遊海を扱あくる物めー御祈とくか隣あ向
タアハあうげてイマモ有ういふのとせらるていのあいさしも
熱ぐらまおてさうおに合らんよムおにわそりーいあま
つらあらりいせぬうあのみつらんハらうぬ千年計もあ
らぬ血のたうあうらうのあからすすらんあま風をい
こもそ福くくばこいなるこちのたらぬも驚風のみが
あうてす作振う計まてじやうる会傍はさふじやあぬと
まをいぬのらうけて一トあまあま物せんさう二らあてり会
出入りあのたうあう大往生要念仏よとられて彼遠路

ふりらぐえ来のゆくまいののまひに程身の毛も
よごちまうりき入くし辱のるたこの火うりよむんがうあ
ひごうにおらんとし笑し一極く世もあつまひしとおひな
いおじやとい年とお付くつりゆをぬきこひいていりか
あぬくは二名程の来りしらけゆるおせんせとまきし
てまておまとい大かいはアウ火家のあで田向とけり
る時密の甲け中火あんとたよまつくともるあつまひ
年ハお十斗とつん一尾扱とアを助けくろねよと
りつるりや二名りのあつまひせら死するゆあめと何
ゆかまかのこりまひこいあつまひせらあつまひと
は同敷

ふえの遍思と痛うちあはは廻向の聲はアラあつまひの
いをゆや仏果ゆんるうこひ形のまるとたふ清うせた
かの押ハせこうりまてゆきぬうまひは速くを助け
てアハと押く切法と志博んやうまひひやまむんが乃
せまあつまひは藤よ素とくはくこ坊ぬこあつまひの
であらましく二名のあつまひはまひはまひはまひはまひ
りまきろてあつまひと火あつまひを竹杖てきくつてお
つござりこころあつまひとせん付てせ申うれいどやと
しゆりあつまひ出まひとやまひとやまひのあつまひと
程こまうてあつまひとやまひとやまひのあつまひと

大行者くちく観音と信作しきつ水と漏し流陽
二年三月の月より二月貴もわくの奉信現世の
取あつて比し一月の経夜日言ふたその前よりふて
常者よゆんより今宵ハ果たぬ通夜せん相と夜具
兵甲して終東沙羅より一舟よき清浄にきおきまに
ねむあくまをとりむとあておしやわらるる者よ観音と正
らと園と出のひ村よはむやふいふをまを年と我
細倍まらるり地よりうし村捨くく是あが志よめんとく
授るあありけ夏暑中よありなは邪念流しして
病よらるしむ者まらるしけ水ハぬもわらるしとく義授る

井の清浄水之是と病よらるしむ者まらるしといふ信の
大病も平念せんりううひやむ水えなは義授
といへし清くらの大海のうきとれおよんを
るはを流うさるへし普く慈悲の心とされを後の日
うらあくまらるしとて年々の仏勅をかくしと行よめい
するお十七夜の時けを念ふよりわれ出るよ目も義授を
さあつらあまりのいあなれい傍ありとらるふ義授
をたるとんれんせんんんのうこれ地刺るり内よ水
あんとと清り眼あのみ験やとつふも義授我よ
志めあふ大慈大悲の善根四徳一割もすく病の人

あつてんとまゝに夜ぬもるもあつてあれと意をよめ
坊さまにけしはよ本津の里物の村馬にあれとあつてし
よてあせむ水にけしあつて信さあれ長化子とや夜にめ
て新田の村をかてよ小倉の堤お海りあつて夜の依ん
花多あつてあつてのりく我信唐へ海り泳泳して日暮前よ
田能をかけりあつても信心海堤よ彼重とあつてあつて
室日くにかつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
にいつりあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
を人もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

はくふの病く屋室よ市をね日くは何も何事
といふてかりあつてあつてあつてあつてあつてあつて
不老不死の冥水大慈大恩の由直とあつてあつてあつて
もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

法次契殿

知つてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
大津よるあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
七い人もあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
度清とすうらあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
るせは竹生海の意よあつてあつてあつてあつてあつてあつて



おろろ
火の玉
せうあふ

Red seal impression at the bottom right corner of the left page.

常しく金持の徳の事もおさうしくいさう火の類も
かまふ事入る所のくせとく家おえの世にうり回る山
のせらゆも世の日にたふあまいふやまらうくまらうまを
よまおろぬ中よまろ人於人の面のを下たりとさう
旅心のちやうちうに寐も中びりて管のるよあめ晴る
とゆるおろふまろ一ツの陰火もきてうり波のうま
たよふよ又いさうは火もの方もあまらうあ火
よあり下りりて入れてはひを成り別しうとして
くする何やうとけさけぶあとなよあ火の海に
あつとぬ怒ろくさう年あり是はゆめけ連して破る

して死す老の魂もほむせあてかく迷ふりの
あうあといとおまろく寐あまらして夜のゆを待
たうり指はする内夜もめ方の鳥は夕雨もあま
てあもあしうあおろく順風まをまろおれおれ
人形は火のまのゆをゆらふおれ例のたうあゆ
あまいさう寐あまらるるあまらるるあまらるる
ハカレるあまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
材を演進あまらるるあまらるるあまらるるあまらるる
か市とをとお果一年の十あまらるるあまらるるあまらるる
いりてあまらるるあまらるるあまらるるあまらるるあまらるる

